

フロックスは

わたしの目

— 盲導犬と歩んだ十二年 —

福澤美和



フロックスは わたしの目

——盲導犬と歩んだ十二年

福澤美和

文藝春秋

〔著者紹介〕

東京に生まれ、白百合高等女学校を卒業。一九五八年に視覚障害者と暗眼者の親睦サークル（ひとみ会）をつくり、活躍している。一九七六年より盲導犬フロックスとくらすようになった。著書に『大とわたしと白い杖』『白い杖の希い』『フー子とママのふたり』『盲導犬フロックスのてがみ』『盲導犬フロックスとの旅』などがある。住所 神奈川県足柄下郡箱根町二の平一・二九七 フジタ箱根山マンション一・一五号

フロックスはわたしの目

——盲導犬と歩んだ十二年

一九八九年一月二十日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 福澤 美和

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三二二
電話 〇三（二六五）一一二一

本文印刷 理想社
付物印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたしませう

© Miwa Fukuzawa 1989 Printed in Japan

ISBN 4-16-342930-1

フロックスとわたし

若草のもえる 春の路も

夏の日ざしに輝く 海辺の道も

わたしたちふたりは いつも

ひとつになって歩く

秋雨に沈む町も

降りしきる雪の中も

わたしたちは 歩調をそろえ

たのしく 歩いて行く

日暮れの街角で

フロックスは わたしに語りかける

「パン屋さんに よるんでしょう？」

駅のプラットホームでは

ひらいた電車のドアの前にすすみ

ちよつととまつて

「ここから乗るのよ」と

わたしの足もとに 気をくばる

わたしが左手にかるく持つ

ハーネスのハンドルをとおして

フロックスの言葉も 心も

つたわってくる

「階段のぼるのよ」

「エスカレーターに乗るのよ」

よい買物ができたときも

楽しい旅行を終えたときにも

「よかったね」と

わたしの心を さきどりするように

よろこんでいるのがわかる

フロックスと いっしょならば

不安も恐怖もない

目が見えないことも

いつのまにか忘れてしまった

わたしたちふたりだけの力で

苦しい道も 楽しい路も

明るく歩いて行きましょう

フロックスは わたしの目

わたしの心は フロックスとひとつ

今日も 幸せの光が

わたしたちふたりを 包んでくれる

目 次

詩・フロックスとわたし

- 一 クリスマスの町を歩く
- 二 フロックスは花の名前
- 三 日傘の思い出
- 四 りこうな不従と左側通行
- 五 小涌園とわたしたちふたり
- 六 バースデーケーキ
- 七 雪だるまをやっつけろ
- 八 「フロックス、わたしの目となって」
- 九 歌舞伎座の一般席で
- 十 初めての旅行で
- 十一 あの人が見えるじゃないか
- 十二 真珠島の王冠
- 十三 結婚式もお葬式もわたしたちふたりだけで

- 十四 フロックスと訪れた北海道の秋
- 十五 カムイパポニカアーノイヤ
- 十六 北海道の旅を終えて
- 十七 わたしのかわいい読者たち
- 十八 クラス会の東北旅行
- 十九 パリ祭の帰りに
- 二十 楽しかった旅、感動の旅
- 二十一 フロックスの家での生活は
- 二十二 旅行でのわたしの買物
- 二十三 フロックスも貝拾い
- 二十四 フロックスの沖縄の仲間たち
- 二十五 思い出に残る兼六園の桜

あとがき

A
D
·
森
玲
子

装
画
·
寺
越
慶
司

フロックスはわたしの目

——盲導犬と歩んだ十二年——

一 クリスマスの町を歩く

昭和六十二年十二月二十五日、クリスマスを迎えた六本木の町は大勢の人たちの足音やたくさん車の騒音のなかに、忙しく動いている。すれ違う人の持っている紙袋の音、こどもたちの笑い声、大きな声で話をしながら道を歩いて行く若者たち、それらの雑踏のなかをフロックスはわたしをどこにもぶつけず上手に誘導して行く。店のドアから流れてくるクリスマスソングのメロディーが、わたしとフロックスの耳もとを通り過ぎて、町の中へ広がっていく。横断歩道の信号でフロックスは足を止め、車の流れ、人の動きに気を配りながら信号の変わるのを待つ。

「信号がわかるのかなあ」

「えらいなあ、うちの犬じゃ、とてもだめだ」

わたしたちふたりの後ろに追いついてきた二人連れがこんなことを話している。神奈川県箱根から盲導犬のフロックスと東京に出かけて来たわたしは、暮の忙しい用事をあちこちですませ、六本木の歯医者さんに立ち寄ってから、地下鉄の駅に向かって歩いて行くところだった。

わたしは網膜色素変性症という目の病気のために生まれつき視力が弱く、年とともに目が不自由になっていった。十五、六年前にはほとんど全盲となり、単独歩行がまったく困難になった。白い杖で歩くための歩行訓練を少し受けてはみたものの、よほど慣れた場所以外は一人で歩くことはできず、他人の手を借りたり、タクシーを利用したり、とても不自由だった。

その頃、わたしはペットとしてダックスフンドのめす犬アンナを飼っていた。こどもの頃から大好きだったわたしにアンナはよく慣れて、だんだん見えなくなってきたわたしの視力を知ってか知らずか、一緒に道を歩くとき、危い側溝や段差のあるところは止まっておしえるようになった。わたしはアンナの引き綱を短く持って、家の近くを散歩したり、買物に行ったりした。犬というものは口はきけないけれども、飼い主の心はよくわかるものだ。わたしは思った。

アンナが老衰で死んだあと、わたしはこんなに目が見えなくなったのだから、今度は盲導犬を持ちたいと思った。当時は盲導犬を手にするまでには、申し込んでからかなりの期間がかかったが、わたしも一年半待って、東京盲導犬協会での盲導犬との歩行指導に入った。あれからもう十一年余りの月日が過ぎてしまったのだ。四週間の盲導犬との歩行指導を終えて、わたしの盲導犬

になったのは一歳七カ月のラブラドル・レトリバーのめす犬フロックスであった。そして、フロックスとわたしが東京盲導犬協会を卒業したのは、昭和五十一年十二月二十五日、東京には珍しく雪のちらついたクリスマスの日だった。

フロックスは毛色はイエロー、体重は二十三キロ、性格は陽性で、なにかといったら喜び、はしゃぎ、いつも大きな目玉をくりくりさせて愛嬌をふりまく犬だった。これは「目の見えない主人のために忠実にいちずに仕事をする」という盲導犬として向いている犬かどうかはわからないが、わたしはフロックスと暮らすようになってから、すぐに思い浮かべるのは東京盲導犬協合理事長塩屋賢一先生の次の言葉である。

「犬という動物は他の動物と違うところがあります。それは熊や馬がサーカスで芸当をするとき、人間から蜂蜜やにんじんなどのほうびをもらって喜んで芸をするのと違い、犬はそれらの方びをもらわなくても、自分の愛する主人が心から喜んでくれることならば、自分から喜んで何でもするというところがあるのです。犬が主人のためにたいへん役立つことをしてくれたとき、その主人が心からほめてやれば、その犬はまたよいことをして主人に喜んでもらおうと考えるのです。このようなところは犬だけが持っているもので、他の動物にはありません。盲導犬は犬のこうした性格を伸ばして生かしているのです」

フロックスは、先へ先へと気がまわってよく気がつき、おしゃまな女の子のようところがあ

る。一度買物をした店の前を通ると、立ち止まってわたしの顔を見る。

「今日は寄らないの？」と言っているようだ。初めて行った駅でも、わたしが「きっぷ」と言えば、自動券売機や窓口をさがす。改札、階段、エスカレーターなども同じようにみつけてわたしにおしえる。わたしが心からほめてやると、しっぽを振って全身でその喜びを表わす。

あるとき、初めて行った銀行で「チェアー」とソファをさがさせたら、あいているところを見つけ、その前に立ち止まった。わたしがフロックスの頭をなで、そのソファに腰かけると、彼女は喜びのあまり床にドターンとひっくり返っておなかを出してしまった。こんなことをするのは本当はまじめな盲導犬ではないかもしれない。初めて降りた駅のホームで、わたしにも階段がどちらにあるのかわからないので、フロックスに、

「ブリッジ（階段のこと）どっちにある？」

と尋ねると、首を右にやったり左にやったりしてさがしている。やがて、階段が見つかる。そちらにぐいと向きを変えてさっさと歩き出す。階段が近づくと、しっぽを振り始めるのでわたしにもわかる。

「ブリッジあったの、よかったねえ。グッド、グッド」

わたしはこんなとき、心からほめずにはいられない。そして、フロックスもうれしそうだ。塩屋先生が「主人の喜びが犬にとっては何よりも喜びだ」と、言われた言葉がわかるような気が